

“切る” べきところは切る
—「英文は切ってはならない」の例外—

英文は左から右へ一方通行で流れる一本の線で、
切ってはならない

が大原則です (㊦ 第93話)。だからこそ、逆に、切るべきところで切らないと厄介なことになります。たしかに“原則”は大切なのですが、それがわかった上で“例外”と分類されることを見落とさないことも、同じように大切なことです。

切る

ことによって安堵感を手にする。「長電話を切る」「関係を切る」…といったように、これは生きていく上でも大きな知恵なのではないでしょうか。

英文を読む場合も例外ではありません。

“切る” べきところでは“切る”

ということです

節ごとにしか訳せない

第4話で、英文を語・句・節という単位で分けて考えました。

I like the town where she was born.

という文を考えてみましょう。where (=関係副詞) の後にS (=she) V (=was) がありますから、そこがひとつの節 (=SVが入った意味のかたまり) を作ります。

これだけ短い英文だと「私は彼女が生まれた町を好む」と一気に理解する、つまり最初からこのように訳すことも可能でしょう。また、だんだん慣れてくると、読む場合は全体を見通して瞬時に意味をとることもできるようになります。

一般に、その言語に習熟してくると、聞くよりも読む方が速くなります。これは、日本語の場合で考えてもわかります。また、英語の一行の長さ、ひいては本の厚さも、人が一度に認識できる長さと無関係ではないとも言えるでしょう。

ただ、最初の英文の場合、「私はその町を好む」→「そこで彼女が生まれた」と節ごとに前から意味をとっていく姿勢を基本とすべきです。要するに、

節ごとにしか訳せない

ということです。

教室で指名されて、「次の文章を訳してみなさい」といった指示が与えられる場合がありますが、本来、これは無理な注文だとも言えます。節がひとつの意味の世界であり、情報の最小単位だからです。